
孤独な魔王と朽ちる少女の邂逅

古時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な魔王と朽ちる少女の邂逅

【Nコード】

N8556X

【作者名】

古時計

【あらすじ】

かつては魔法が存在したが現在では消え失せた世界で魔法を使う者の王、通称魔王

王だった男は深い森の中で孤独に生きていた。

人に気味悪がられ、避けられていた彼の前にある日、一人の少女が現れる。

そして彼女は驚くべきことを言った。「私を殺して」

そこから、止まっていた魔王の運命が動き始める。

五話完結です。既に五話まで完成しています。

一話あたりは短めです

忘却のプロローグ（前書き）

作風を変えてみました。

忘却のプロローグ

朝の日の淡い光が乾ききった大地を照らす。

枯れかけて、緑から茶へと変わりかけている草花の上で、少女はもう何度読ん

だか分からない一冊の本を眺めていた。

それは彼女が幼い頃に愛読していた本だ。

だが、少女は溜め息をつき、乱暴に本を投げ捨てた。

少女は赤く腫れた目を腕で覆い、呟く。

「何よ……こんな世界のどこにもないじゃない」

地面に叩きつけられた本のしおり代わりに四つ葉のクローバーが挟んであった

ページが自然と開く。

そのページには挿絵の他に一行だけ言葉が綴られていた。

“そして、皆仲良く幸せに暮らしました”

風が吹き、しおり代わりに四つ葉のクローバーが宙を舞う。

だけど、水分を吸って重くなった本のページは動かない。

魔王、男はそう呼ばれていた。

別に自分から名乗った覚えはない。

ただ、確かに男は魔王であった。

魔法を使う者の王、初めはそういった意味だった。

しかし、時が経ち、科学と呼ばれるものが誕生し、発達した今、魔法は廃れ、忘れられていった。

原因は単純だ。

科学の発展と共に人々は夢を、愛を、平穩を忘れ、妖精が死に、この世から魔力が消え去った。

そして、魔法を使える人間はいなくなったのだ。

ただ一人、魔法の王であった彼を除いて。

魔法がなくなった、いや、不要になった世界では、彼もまた不要であった。

人々は新たな社会に順応できない彼を最初は哀れんでいたが、やがて疎ましがり、最後は避けるようになった。

彼の周りには魔力を体内で生成できる動物のみが残り、いつしか彼は魔物の王といった意味で魔王と呼ばれるようになった。

もし、神様というものが存在するのなら、それはとても残酷なものに違いない。

彼は、魔法が人々の間から消えたその日から年をとらなくなつた。

彼が望んだことではないのに。

死すら叶わぬ夢となった彼に、『永遠の孤独』という言葉が重くのしかかった。

それでも彼は信じ続ける。

いつか、きっと、昔のように皆が彼を受け入れてくれると。

世界は無情に回り続け、やがて男は一人の少女とで会う。

忘却のプロローグ（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告などとして頂けると嬉しいです。

失意のファーストコンタクト

小鳥達の囁りで魔王は目を覚ました。

これはいつもの習慣だ。

何故なら小鳥の鳴き声以外に朝、自分を起こしてくれる者などいないのだから。

もしも、街に住んでいたのなら人々が行き交う賑わいで目を覚ますのかもしれない。

だが、彼が住んでいるのは街の中ではなく森の中だ。

深い、深い森の中。

ここに人が訪れることなどほとんどない。

理由は単純明快だ。

人々はこの森を怖れて近づこうとしないのだから。

そんな森の中のちっぽけな木の小屋に魔王は住んでいる。

彼は自分の住むその小屋を多少の皮肉を込めて魔王城と呼んでいた。

深い森の中のちっぽけな魔王城、そこで彼は暮らしている。

「おはよう、テッド。ちょっと待ってて、今持ってくるから」

窓の側に止まっている小鳥に声をかけた。

何の意味もないのだろうが、小鳥はまるで返事をするかのよう
に鳴き声を上げる。

棚から取り出したパンを細かく千切りながら魔王は微笑んだ。

それを木製の器に入れて、窓の側に置く。

「ほら、今日は多めだぞ」

小鳥がパンを啄むのを眺めながら、魔王は自分の食事の準備を始めた。

昨日摘んだ紅茶の茶葉を、金属でできた容器に入っている、小川から汲んできた水の中に入れて火で沸かす。

食事の用意をする分には魔法も便利だ。

と、言っても、街の方へ行けばもっと便利に火を使える道具もあるらしいのだが。

「今日こそお芋が取れるかな？ 昨日見たときはあと少しって感じだったし」

と、窓の外の景色に目をやった時に彼は気づいた。

「森が、騒がしい？」

不審に思った魔王が外に出てみると、彼の畑のすぐ側に一人の人間の少女が倒れていた。

「人間っ!？」

驚いた彼は少女に駆け寄る。

その時、倒れている少女の体が動いた。

腕を掴まれ、バランスを失った魔王と少女の目が合う。

それは失意しか写っていない瞳だった。

この世に絶望しきった瞳だった。

少女の口が開く。

「あなたが、魔王？」

少女の問いに魔王は思わず目を逸らした。
だが、確かに答える。

「そうだよ。私が魔王だ」

その答えに少女は安堵したような溜め息をもらした。

「あなたには、私が見えるのね？」

その問いに魔王は疑問を持ったが、きちんと答える。

「もちろん、見えるよ」

「よかった。じゃあ、お願いがあるの」

少女の言葉はおかしい所が多かったが魔王にとってはそんなこと
とどうだってよ
かった。

なんて言ったって、久しぶりの話相手なのだ。

「なんだい？」

だが、少女の口から出た言葉は魔王の想像を絶するものだった。

「私を殺して」

失意のファーストコンタクト（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告などとして頂けると嬉しいです。

決意のセカンドインパクト

「な、何を言っているんだい？」

大きく目を見開いた魔王に、少女は再度言う。

「私を殺して」

少女は弱々しく微笑んでいた。

魔王は彼女の失意に染まった目を見て、それが彼女の本当の気持ちだということを知った。

そして同時に思った。

何故、目の前にいる少女が死を望むのかそれを知らなくてはいけないと。

そう思った矢先に少女が咳き込む。

「大丈夫かい!？」

魔王が少女の背中をさするが、少女の様子は一向によくならない。

しばらくすると、少しは良くなったのか少女は再び魔王を見つめた。

「心配しないで、さっきのはただの発作だから」

「発作って、病気なのかい？」

「まあ、そうね。それより、さっきのお願いの答え、出してくれた

？」

真つ直ぐ魔王を見つめてくる少女を見つめ返し、魔王も口を開いた。

「まだ、分からない。理由を教えてくださいませんか？ 君が、死を望む理由を」

「私が、死を望む理由？」

少女は少し困ったように視線を落とし、黙り込んだ。

「それを教えて貰わない限り、私は判断できないよ」

「あなたって、奇妙で恐ろしい存在だって聞いていたけど、そんなことないわね」

「私は一度も奇妙で恐ろしい存在になったことはないつもりなんだけどね」

魔王が肩をすくめてみせる。

またしばらく黙り込み、やがて少女は口を開いた。

「忘却症って知ってる？」

「忘れる病気がい？」

「そうね。正確には忘れられる病気なんだけど」

「忘れられる？ 人の記憶からかい？」

魔王が聞き返す。

「そうよ。人の記憶から、飼い犬から、世界から、忘れられて、やがては消滅す

る病気」

「そんな病気がこの世界に？」

「それに私はかかっているの。見て、私すこし透けているでしょう？」

少女に言われて魔王は少女をまじまじと見つめる。

言われてみると確かに少女は少し透けていた。

「この病気はね。最期には消滅するの。だから、私が生きた証拠は何もなくなる

。だから、その前に私を殺して欲しいの」

少女は言う。真剣な瞳で殺して欲しいと。

「死ぬ前にやりたいことはないのかい？」

魔王が尋ねた。

「ないわ。強いて言うなら、“皆で仲良く幸せに暮らせる世界”を見たかった」

「なら、死んだら駄目だ。その世界を見るまで死んだら駄目だ」

「無理よ、そんなもの」

少女は首を横に振る。

「どうしてそう思うんだい？」

「私はね。こう思うの。きっと、世界のあちこちで忘却症になった人がいて、皆

に忘れられていつてるんだって。それで、残された人はその人への愛とか、その

人からの愛とか、悲しくて流した涙とか、嬉しくて流した涙とか、大事なものを
全ていっぺんに忘れて、失って、悲しくて耐えられなくて悲しい思
いが爆発して
、争いが起こるんだって」
「全て忘れて……か」

魔王は思う。

魔法がこの世界から忘れて去られたように、自分が人々と仲良く
していた事実
が忘れ去られたように、多くの大切なものが忘れ去られていって
いるのだろう。

それは、もしかしたら少女の言うとおり忘却症のようなもの
せいかもしれない。
い。

「だから、私は思うの」

少女は言葉を続ける。
失意に染まった目で、続ける。

「私達は大切なものを覚えておくことができないから。何一つ記憶
に留めておく
ことができないから。忘却症に抗うことはできないから。きっと、
私が見たかつ
た“皆仲良く幸せに暮らせる世界”なんて存在できないんだって」

話し終わってから、少女は黙り込んでいる魔王を見つめた。

「ねえ、私を殺してくれるでしょう？」

「殺さないよ。私は君を殺さない」
「どうしてっ!?!」

少女が初めてヒステリックな声をあげた。

「君はたぶん、既にほとんどの人に忘れられたんだろう? だから、他に頼める人がいなくて私に殺されに来た。でも、それじゃあ、消滅するのと同じじゃないか。確かに私の記憶には残るかもしれないが、それだけだ」
「何が言いたいのか?」

少女は問う。

「もし、もし良ければ私と一緒に過ごしてくれないか? 確かに記憶の中の思い出は忘却されるかもしれない。だけど、思い出っというの本当は記憶じゃなく、心に残るものじゃないのかい?」

黙り込んだ少女に魔王は微笑みかける。

「確かにここは寂しいところかもしれないが、少なくともここは平和だよ」

その日から、魔王城に新しい住人ができた。
忘れっぽくなった魔王だったが、少女の存在だけは決して忘れなかった。

決意のセカンドインパクト（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告などとして頂けると嬉しいです。

絶望のモノローグ

少女が魔王と共に過ごし始めてからひと月近くが経った。

既に少女はかなり透明に近づいていた。

もはや、目をこらさなければ見えない程度まで。

「私を殺して」

少女はここひと月近く言っていなかった台詞を久しぶりに吐いた。

「断るよ」

魔王は首を横に振る。

「怖いの」

少女はベッドに横たわったまま、上を見上げて言った。

「何がだい？」

魔王が尋ねる。

「あなたから私が消えるのが怖いの」

震える少女の手を魔王が優しく包み込んだ。

確かな温もりが、そこにはあった。

「大丈夫。消えたりなんかしない。ずっと、覚えているよ」

「自分がもうすぐ消えるのが分かるの」

「大丈夫、まだ、きつと、大丈夫」

「ねえ？」

「何だい？」

「信じていいよね？」

「うん」

「私のことずっと覚えていてくれるって信じていていいよね？」

「うん」

少女は優しく微笑む。

彼女の瞳には以前のような失意はなかった。

「そっか。私、幸せだな。誰かが自分のことを覚えていてくれるってこんなに嬉しいことなんだ」

魔王は俯いていた。

安心させなきゃいけないのに、既に魔王の顔は見せれるものではない。

「ねえ？」

「何だい？」

魔王は鼻声だった。

「顔を、上げて」

少女に言われて、魔王はゆっくりと顔を上げた。

いつの間にか手が震えているのは魔王の方で、少女は魔王の手を優しく包み込

んでいた。

少女は魔王の顔を見つめて、最高の笑顔を浮かべて言った。

「ありがとう」

斯くして少女は消滅した。

だが、魔王の心から少女は消えることはない。
決して消えない。

「さて、私も一つやるべきことを果たさないと」

魔王にはまだ一つやるべきことがある。

それは、あの少女が望んだ“皆仲良く幸せに暮らせる世界”を
実現させること

世界を蝕む忘却症に対し、魔王がとった手段は、自ら悪役を演
じること。

圧倒的な絶望を記憶ではなく人々の心に植えつけること。

それに立ち向かわせる為に争っている国々をも一致団結させるこ
と。

そして、巨大な悪を倒した達成感と一体感、平和の素晴らしさ
を人々の心に植
えつけること。

魔王の独演劇が幕を上げた。

絶望のモノローグ（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告などとして頂けると嬉しいです。

希望のエピローグ

魔王はたくさんの人間の兵士に囲まれていた。

彼は体中に傷を負っていた。

死にたくても死ねない体になったと思っていた彼は笑みを浮かべる。

「なんだ、死ねるじゃないか」

もし、神様とやらがいるのなら、この為だけに自分を生かし続けたのかもしれない。

皆仲良く幸せに暮らせる世界を作るための手段として生かし続けたのかもしれない。

それは、残酷で勝手な行為だ。

「だが、悪くない」

魔王は不敵に笑った。

人間の兵士達が魔王の様子を窺っている。

「どっつしたあっ！？」

魔王は叫ぶ。

「ここだ！！　ここにいるぞ！！　私だ！！　貴様達の敵は私だ！

！」

吼える。

「貴様達の敵は、ここにいるぞおおおおおおおつー！」

人間の兵士達が魔王に向かって銃弾を放つ。

魔王を包む魔力のせいで銃弾が届くことはないが、注目を引くには十分だった。

後ろから、人間の兵士が魔王に向かって突っ込んで行く。

兵士の剣が魔王に届いた。

激痛に顔をしかめながらも魔王は最期の力を振り絞り叫んぶ。

「私は何度でも蘇って貴様達を追いつめてやるっ！！ 覚悟しておけっー！！」

薄れる意識の中で、青い空を見上げて彼は心の中で呟いた。

「私は君のことをまだ覚えているよ。君は私のことをまだ覚えてくれているかい？」

魔王がこの世を去った後、人々は「皮肉なことに魔王が平穩を齎してくれた」

と囁き合うようになった。

いつか、この魔王の存在も忘却症によって忘れ去られ、争いが再び始まるかもしれない。

だけどそれは、まだ当分は先の話だ。

完

希望のエピソード（後書き）

表現を一部変えました。

近いうちにこの作品の世界観を引き継いだ作品を投稿する予定です。
よければ、そちらも読んでみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8556x/>

孤独な魔王と朽ちる少女の邂逅

2011年11月13日23時02分発行